# 希望の明日へ

**恐怖におびえ、悲しみに暮れた3・11から3年**
**被災地への思いや震災への意識は少しずつ変化している**
**復興を合言葉に重ねてきた1096日の月日をどう捉えるのか**
**そして今、何を考え、どのように行動すべきなのか**
**もう一度あの日を思い出し、共に明日を考えたい――**

復興は全ての人の願いであり、再建に全力を尽くすことは言うまでもない。だが、街の景観が戻っても、そこに働く場がなければ暮らしは成り立たない。人が集わなければコミュニティーは取り戻せない。復興とは、「街の再生」だけでなく「産業の再生」「文化の再生」、そして「暮らしの再生」である。その根底には「心の再生」が不可欠だ。

東日本大震災のように、同時広域的に発生する大規模災害が起きた場合、消防や行政だけの力で広い市域を守ったり、多くの人を助けたりするには限界がある。被害が大きい場合、支援の手が届くまで数日程度、ライフラインの復旧まで1週間以上かかることを覚悟しなければならない。

そこで、注目されているのが自主防災組織だ。民区や自治会を単位に組織され、地域に精通した人たちが「自らの命は自らが守る」を合言葉にフットワークよく活動する。

防災の第一歩は、コミュニティーの再生といわれている。そもそもまちや集落は、人と人とのつながりによって生まれたコミュニティーであり、人あってのまち、そして経済なのである。自然との関わりを尊重するまち、人々の心がしっかり結ばれたまち、歴史や文化が息づくまちが、ひいては災害に強い「真のコミュニティー」を形成していくといわれている。

3・11は、今後の進むべき道を考える日でもある。市は昨年、3月11日を「となりきんじょ防災会議の日」に制定した。震災の記憶を風化させないために、教訓を語り継ぐために、家庭、職場や地域で身近な人と語り合う日だ。あの日、何が起きたのかを振り返る。何ができて、何ができなかったのかを検証する。それらを教訓に、家庭で、地域で、防災力を高めよう。

少子高齢化、人口減少、地域コミュニティーの維持、雇用の確保など、被災地の課題は地方の自治体が抱える課題と重ね合わせることができる。つまり、復興の行方は、被災地だけでなく、地方の明日を映し出していると言っても過言ではない。

震災で多くの尊い命や大切な財産が奪い去られ、豊かさの指標は変わった。だが、決して奪われなかったものがある。やさしさ、感謝、そして愛だ。寄り添い、支え合い、助け合って暮らす安心感は、今も、昔も、これからも変わらない古里の「宝」だ。

あの日から3年。私たちは今、あらためて人と人とのつながりやお互いさまのありがたさなど、普段忘れがちな「縁」や「絆」の大切さを認識している。

あなたの言葉が誰かの笑顔に
あなたの行動が誰かの勇気に

自分のことは後回しで被災地を支え、共に歩いてきた一人一人の行動こそ、震災という絶望を未来という希望に変えていくチカラの源。復興を加速させるのは、あなたの一歩だ。